

<株式会社エフエム東京 第 473 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 2 年 11 月 4 日（水）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 11 階 JET STREAM 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

ロバート キャンベル 委員長 内 館 牧 子 委員  
川 上 未 映 子 委員  
佐 々 木 俊 尚 委員 松 田 紀 子 委員

◇欠席委員（1 名）

秋 元 康 委員

◇社側出席者（7 名）

唐 島 代表取締役会長  
黒 坂 代表取締役社長  
小 川 常務取締役  
内 藤 執行役員編成制作局長  
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー  
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長  
若 杉 編成制作局制作部長 オブザーバー

◇社側欠席者（1 名）

西 川 取締役副社長

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 27 分）  
『SUBARU WonderfulJOURNEY ～土曜日のエウレカ～』  
10 月 24 日（土）17：00～18：55 JFN 全国 38 局ネット

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■2020 年 8 月度 聴取率調査結果

2020 年 8 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果を報告します（2020 年 9 月 7 日～13 日）。まず当社コアターゲット【男女 18-49 才】の全日平均においては 4 月・6 月度と同じく在京首位となりました。

また、【男女 20 - 34 才 (M1F1)】、【男女 35 - 49 才 (M2F2)】及び【男女 10 代】、【男女 20 代】、【男女 30 代】でも首位となり、当社が獲得すべき各ターゲット区分において在京局の首位を獲得いたしました。

今回は、編成強化ターゲットに「M2F2 (男女 35-49 才) 対策」を掲げ、約 1 か月をかけて特に選曲面や社会的関心事に通じる内容テーマの建て直しを図り 8 月度調査に臨みました。その結果として【M2F2】をはじめとする各世代区分でスコアが増加、高いリーチを維持しながら聴取分数も伸ばせており、特に平日ワイドは Blue Ocean～Skyrocket Company までの主要 6 番組でコアターゲット首位を獲得するなど改善効果が顕れました。ただし土日は、特に午前帯のスコアが伸び悩んでおり課題点も浮き彫りになっております。この点は昨年来進めてきた編成改革の重点テーマのひとつである、時間帯・ゾーンとしてのイメージ作り、顔作りを営業動向も見ながら継続的に進めてまいります。

■作家・村上春樹氏プロデュースイベント「村上 JAM」世界オンライン配信

作家・村上春樹氏の特別番組「村上 RADIO」から生まれ、昨年大反響となった村上氏プロデュースによるスペシャルライブイベント「村上 JAM」(昨年 6 月 26 日実施)の第二弾が決定、2021 年 2 月 14 日(日)のバレンタインデーに TOKYO FM ホールで開催することが決まりました(※情報解禁は 12 月を予定)。

昨年はリスナー完全招待での実施となりましたが、今回は会場への集客だけではなく、広く事前告知の上、オンライン配信コンサートとして全国に向けた券売方式での実施を計画しています。またオンライン配信では従来の日本語のみならず、今回は英語版での配信も行い、世界に向けた券売も実施する予定です。

今回の村上 JAM は“Bossa Nova”をテーマに掲げ、村上氏と親交が深い大西順子 BAND をホストバンドに、小野リサ氏、ジャズピアニストの山下洋輔氏をはじめとする豪華ミュージシャンを迎えるほか、村上春樹氏による朗読や、氏の人脈による世界のエンターテインメントシーンからの豪華なゲストとのトー

ク・セッションなどの企画も検討しております。昨年実施時には 10,000 件を超える応募があり、抽選で選ばれた 150 名のリスナーを招いた希少なプレミアムイベントとなりましたが、第二弾はより多くのリスナーや村上春樹ファンにも参加頂ける形式をとることで前回以上のスケール感で大きな話題喚起に繋げてまいります。



▲昨年 6 月 26 日@TOKYO FM ホール「村上 JAM」イベントの様様

また、毎年恒例の JFN 年末年始特番（2020 年 12 月 31 日 23 時～2021 年 1 月 1 日 1 時）も、村上春樹氏にご担当頂くことが決定いたしました。今年度の日本民間放送連盟賞ラジオエンターテインメント番組部門最優秀賞を受賞した「村上 RADIO ステイホームスペシャル～明るくあしたを迎えるための音楽」で、新型コロナウイルスをめぐる厳しい状況下、厳選した音楽とその紡ぐ言葉で、リスナーに、人々の愛や思いやりの大切さを実感させ、明日への前向きな気持ちを持たせてくれた村上春樹氏が、2021 年の幕開けにどのような音楽と言葉を届けてくれるのか、正式な発表は今後となりますが、JFN 各局から早くも大きな期待が寄せられています。

## ■楽天カード presents FM FESTIVAL 2020 『MUSIC CHRONICLE ～竹内まりやと辿る音楽の 50 年』

TOKYO FM をはじめとする JFN 全国 38 局ネットでは、2020 年 11 月 3 日（火・祝）16:00～19:00、「楽天カード presents FM FESTIVAL 2020 『MUSIC CHRONICLE ～竹内まりやと辿る音楽の 50 年』」を放送いたしました。

1972 年から放送してきた「FM FESTIVAL」では、これまでに音楽をテーマとしたさまざまな番組を放送してきました。2010 年からは若者に向けて知の祭典「未来授業」を 10 年間開催。2019 年に FM 愛知、2020 年に FM 大阪、TOKYO FM、FM 福岡の 3 局が開局 50 周年を迎えた今年は、民放 FM 誕生 50 年という位置づけで FM ラジオの原点回帰ともいえる音楽企画となりました。

番組では、メインパーソナリティに竹内まりや氏を迎えて、竹内まりや氏の音楽史を楽曲とともに振り返りながら、竹内まりや氏が初めて聴いたラジオ、学生時代の音楽体験、デビューからシンガーソングライターとしての活動、大瀧詠一

<第 473 回放送番組審議会議事録>

氏、服部克久氏、筒美京平氏との思い出、結婚後はステージから離れて、様々なアーティストに楽曲を提供、そしてまた舞台へと、年代ごとにたくさんのエピソードを語りました。そして、竹内まりやの楽曲プロデューサー・バンドマスターでもある山下達郎氏との“スペシャル夫婦放談”も実施。2人の音楽活動、レコードにまつわる山下家のエピソードなどをたっぷり伺いました。番組の進行は、TOKYO FM の顔として長きにわたりワイドパーソナリティをつとめ、FM史を語る上では欠かせない存在でもある坂上みき氏が担当。竹内まりやの独身時代最後のライブ、1981年の貴重な音源もお届けし、貴重な3時間の特別番組となりました。



◀坂上みき氏 (左)、竹内まりや氏 (右)

**【委員の意見および社側説明】**

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○村上 JAM 第二弾の決定、おめでとうございます。オンライン配信コンサートとして、全国・世界に配信ということだが、英語版については時間をおいて編集して配信するのか。

■その予定。日本語はリアルタイムで、英語版は何日後というようなお知らせができればと考えているが、リアルタイムについては、サーバーが落ちるなどのアクシデントもあるようで、本当にそれがいいのか、もしくは、収録してすぐに配信、という方法がいいのか最善の形を検討している。

○アクセス数が期待できそう。会場に観客を入れるのか。また、海外からミュージシャンを招くのか。

■限定にして観客を入れる予定。海外からはリモートで検討している。

○課題を残しながらも聴取率が上がったとのことだが、選曲面や社会的関心事に通ずるテーマなど、何か工夫したことはあるのか。

■選曲面で徹底してきたのは、なぜその日にその曲をオンエアしたのか、理由を明確にして、それをさりげない言葉でリスナーに伝えるということ。村上春樹氏が「村上 RADIO ステイホームスペシャル ～明るいあしたを迎えるための音楽」で、選曲理由を、すごく心に届く言葉で語ってくださった。あの番組をお手本に、その曲を選んだ理由をリスナーに届く言葉で伝えるということを徹底した。その結果が非常に顕著に表れたかなと思う。

○村上春樹氏がここまで一緒にやるのはすごいこと。他の関係者が嫉妬をしていた。素晴らしいことだと思う。

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

『SUBARU WonderfulJOURNEY ～土曜日のエウレカ～』

【放送日時】

10月24日(土) 17:00～18:55 放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご視聴いただくのは、この10月からスタートした毎週土曜日17時に放送の新番組『SUBARU WonderfulJOURNEY ～土曜日のエウレカ～』のダイジェストです。この番組は、土曜日の夕方17時から、たった1時間だけ営業する架空の旅行会社エウレカドライブコーポレーション、通称EDCを舞台に、パーソナリティつとめる麒麟・川島明が、毎回多彩なジャンルのゲストを招き、その方の思い出のある地へ、リスナーの想像力を頼りに、日本全国、世界各地、時空も超えた小旅行にお連れしています。

川島明は、ドライバー役で、他に車載されたAIとしてナビゲーター「マイア」、車のメンテナンスを行うEDC専属のエンジニア・中島一郎、社内で聴いているラジオのDJ役にDJ小黒が登場。ラジオドラマとノンフィクションが融合した構成になっています。

今回ご視聴いただく10月24日(土)の放送回では、小堺一機氏をゲストに迎え、小堺氏の人生の転機となった1964年の浅草、1977年の銀座テレサ、1986年ニューヨーク、などを当時のエピソードを伺いながら巡りました。



【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○非常に面白く拝聴した。萩本欽一氏はやっぱりすごい。こういうノンフィクションとドラマを合わせるといのは、おそらく昔からある手法だと思うが、逆に今、新鮮に感じる。連載を持っている関係でドキュメンタリー映画もたくさん観ているが、ここ近年、ドキュメンタリーだが昔の NHK スペシャルみたいな正統派のドキュメンタリーじゃなくて、ドラマやアニメを織り込んでいる作品が非常に多い。そうすると何が良いのかというと、観ていて飽きない。ずっとインタビューを重ねて美しい映像を重ねてという王道なものは、50 分間しっかり観ると面白いが、途中から気が散ってしまうことがある。今の時代、YouTube とかで 30 秒、2 分とか、短い尺がすごく多いので、長編に慣れていないこともある。そんな中でアニメとドラマ、ドキュメンタリーが切り替わっていくという作りは、けっこう飽きないで観ることができる。最近のドキュメンタリー映画制作の手法でもよく出てきている。

また、音楽の場合でも、以前はアルバム単位で音楽が聴かれていたが、今はアルバムでは聴かなくなっている。iTunes の時代では、単発の曲として、1 曲 1 曲で聴かれるようになった。マイクロコンテンツ化と言って、パッケージから解放されて、どんどんマイクロ化してくるようになってきている。さらに最近ではマイクロ化どころか、もっとフラグメンテーション化している。

Spotify とか Apple Music みたいなストリーミングでは、人は、冒頭のサビ、楽曲の冒頭で聴くかどうかを決めてしまう、ということが起きている。そうすると、最近の楽曲の特徴は、サビが頭になっているのがすごく多いというような話が、音楽の世界では言われていたりする。集中力を保つのがなかなか難しい。みんなスマホを見ながら、Twitter をやりながら、Facebook をやりながら、何かの記事を見ながら、それですべてに radiko も聴いているみたいなことになってきていると思う。

1 つの番組を頭から最後まで通して聴いて、というのは、本来的に素晴らしい王道的な聴き方。でも実際は、なかなかそうしてもらえない。放送局側でどうやってリスナーの脳内に届いて、また、何かをしながらでも聴いてもらえるか、そういう工夫が必要だと思う。

例えば「テラスハウス」。問題になった番組だが、問題の件ではなくて番組の構成の話。「テラスハウス」というリアリティショーで演じる人たちが出てくる部分と、それについて語り合う山里亮太氏などのスタジオ部分と両方ある。その両方が、物語を支え合う構造になっている。「テラスハウス」のコンテンツ部分だけ観ていると、話の筋が途中で分からなくなったりする。登場人物も全員追っかけているわけじゃないので。そこで、スタジオに切り替わって、山里亮太氏と

かが説明して、いろいろツッコミをしていると、「今こういう場面だったんだ」と、視聴者は初めて理解する。

コンテンツの部分を、どうやって補強してストーリーを上手く支えていくかというのが、結構重要なかもしれない。本日聴いた小堺氏のトークは、トーク自体はものすごく面白いけれど、一生懸命聴かないと分からない。そこで、コンテンツ部分のトークを支える形で、メカニックの人とかAIの人とかが出てきて、ドラマ部分でそれを逆に支えている。普通は、ドラマ部分があって、スタジオのトークが、それを支える構造になるのに、これがまったく逆転するというなかなか面白い構造になっているという発見があった。現代のザッピング時代というか、フラグメンテーションの時代というか、そういう時代に合わせた番組構成って、実はまだまだいろいろと考える余地があるんじゃないかな、と考えさせられる所があった。面白かった。

○単なるトーク番組にしないで、ドライブで旅していく構成は、すごく面白い。そのアイデアは、すごく使えると思う。車内でのやり取りなど、いろんなことができる。自身もその気分になって聴く人が多いんじゃないかと思う。

○1つもったいなかったのは、どこにでも行けるという面白さがあるのに、それを活かしきれていないなという気がした。これはダイジェスト版なので、全部を聴けば、もっと活きているのかもしれないが、今日聴いた限りで言うと、活かしきれていない気がした。最初、浅草のSEがワーッと入ってきて、その後、静かになって、これはどこか静かな所で喋っているのかな？と。そうすると、浅草に行く設定にする必要があったんだろうかって。スタジオで浅草の回想をしているのと変わらないというか。そこら辺の面白さが、どうも活かしきれていない気がした。

○ラジオドラマとノンフィクションが大変上手く絡み合っているし、上手く絡めようという気持ちもよく出ていて、とても面白いアイデアだと思うが、ラジオドラマの部分は、もう少しクオリティが高くてもいいと思う。川島氏の声がすごく落ち着いていて、上手く小堺氏の話を引き出している。それだけに、ここでラジオドラマが上手くなかったり、単にやかましいだけのものになるとがっかりする。せつかくこれを融合させようとしているのなら、もう少しラジオドラマのクオリティを上げると面白くなるのでは。

○ラジオドラマの部分を聴いていて思ったのが、「メンテナンス」「DJ」「AI」によるナビが入っていて、加えて本編ゲストがいる。こんなに人数いるんだろうかと。突然、ナビが電子音みたいな喋り方をしたりして、「これは何を目的と



しているのかな？」という気がした。今風にしようと思ったのか、聞こえ方を柔らかくしようと思ったのか。ここでAIのナビの声は、私はまったく不要に感じ、全体的にやかましく聞こえた。せっかく雰囲気が出ているのだから、もっとナビの声が上手く絡むよう工夫をしてほしい。

むしろ毎回川島氏とゲストだけにして、メンテナンスとかAIとかDJは、ちょっとカーラジオをつけたときに、さりげなく流れてくるような構成にする方が、そこから話がまた広がるのではないだろうか。

○楽しく拝聴した。これは今回のゲスト・小堺氏とのコントラストも関係しているのかもしれないが、やっぱり登場人物が多いなという印象を受けた。ゲストだとか、声のトーンだとか、そのバランスによって変わってくるかもしれないが、もうちょっと整理されてもいいのかなと思う。それ以外は、ゲストの個人史とその時代の文化史みたいなものが上手くまとめられていて、上手く繋がっていた。また、実際の固有名詞がたくさん出てきて、リスナーの関心と上手く繋がっていく有機的な番組に仕上がっているのではないかなと感じた。

○小堺氏は、私とは時代が違うが、お名前はもちろん存じ上げている。テレビでも拝見してきた。「ごきげんよう」の人。小堺氏はすごく感じの良い、好感度の高い芸能人という認識があったが、今日改めて聞いてみると、本当にお話が上手ということが分かる。緩急をつけていたり。麒麟の川島氏の合いの手もすごく上手い。ストレス、バッティングがない。すごくこのバランスが素晴らしいなと思った。同じ時代を共有できなくても、声であるとか、語りであるとか、単に内容を追うだけでなく、そこで誰かが話しているということ自体に、すごく快感がある。ザッピングをしながら、聴き流していく番組ももちろんあると思うが、しっかり聴くということから共有される内容と、「ラジオって声なんだな」とか「語りなんだな」とか、何かそこですごく「良いものが鳴っているんだな」という感受の仕方もあるんだということを確認した。

○私も楽しく聴かせていただいたが、ダイジェストだから仕方がないと思うが状況が上手く飲み込めなかった。ドラマとドキュメンタリーの融合というのは説明いただいたので分かるのだが、登場人物が多すぎて、耳だけで拾っていくには忙しく感じた。映像だったら、要素はいろいろあったほうが良いと思うが、耳だけだと「この人は誰だっけ？」みたいな部分がところどころあり、聴いていて落ち着かない感じがしてしまった。

○タイトルの「土曜日のエウレカ」、エウレカはギリシャ語の由来で、「何かを発見・発明したことを喜ぶときに使う言葉」とネットに出てくるが、エウレカとい

う言葉に全然馴染みがないので、タイトルを聴いた時、「これから何を聴かされるんだろう？」と、想像がつかなかった。これを聴いて、「誰に、どこに連れて行かれるんだろう？」という、落ち着きのなさを感じながら聴いた。もう少しじっくりくるタイトルがあったら、「そういう番組なんだ」と連想して多くの方にそういう気持ちで聴いて楽しんでもらえるのかなと思った。

○小堺氏は本当にお話が上手な方だなというのが分かって、安心して聴けた。タイムスリップのような形式で、時間も場所もどこにでも行けるというコンセプト。過去に行けるというコンセプトを活かすとしたら、思い出話とか、「昔こういうことをやっていたんだよね」みたいな話は、すごく話しやすいと思う。聴いている側も「そうだったんだ。この人って、こういう経験をされていたんだ」という発見があると思う。それを踏まえると、なかなか口を割らないような方とか、「あまり登場しないよね」と言われるような方など、ゲストの幅をすごく狭くして、「この番組だったら出る」みたいな感じにもっていったら、「今日は誰が登場するんだろう」みたいな楽しみも生まれるのでは。過去に戻るというコンセプトにも活きるし、麒麟の川島氏はお話を引き出すのがすごくお上手なので、彼の特徴が生きてくる。もっと多くの方に聴いてもらえる番組になるのではと期待する。

○SUBARU の 1 社提供で、SUBARU 車を上手く扱いながら、番組を車体のようなものにしてこのような番組を作っていくということが、すごく分かりやすく見えていて良いなと思った。

○川島氏は、すごく合の手が上手い。上げたり、おだてたり、呼び戻させたりということがすごく上手い。ただ川島氏は声が低い。川島氏が低く重い声で、中島というエンジニアもすごく重い低い声。そのせいか中島氏の声が大げさに聴こえた。全体の声の比重をもう少し考えて配置したほうが、想像するには役に立つのかなと。例えば、マイアというナビゲーターが若い女性だということはいいが、出演者をせかしたり、「これはできません」とか厳しく言ったりするところが、だらしない男たちの尻を女性が引っ叩いているような気がした。逆に、エンジニアを女性にして、ナビゲーターを若いクリアな声の男性にしたらいいのになと思ったりしながら聴いた。

■ありがとうございます。

今後の番組作りに活かしていきたいと思う。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「Ready Saturday Go」

11月28日(土) 6:00~6:40 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>